

底のない沼

底のない沼

石千代子

三一書房

底のない沼 著者／大石千代子 1962年4月
20日／第1版発行 発行者／田畑 弘 発行
所／株式会社三一書房（東京都千代田区神田
駿河台2の9）印刷／同興印刷株式会社 製
本／橋本製本所 ©1962年著者／定価 360円

フィリピンに10数年在住 『ベンゲ
『山に生きる人びと』『交換船』など
現住所 東京都中野区大和町274

底
の
ない
沼

一章

東京駅から湘南電車にのって、二時間ばかりして〇駅についた。

湯本ミネに教わったとおりに、駅からすぐのところにその保育園はあった。

うっそうと茂った木立と、高い塀にかこまれた宏壮な邸宅の前に、大きなみかげ石の門があつて「ビアトリス・ホーム」とかいた表札が出ていた。

こんなりっぱなおやしきの中に、七年前に別れた私の娘エルザがいるのだろうか、くろんぼの兵隊ジョウとの間に生まれたあの子は、もう八つになっているはずだった。私はその日、母の富枝や占部千吉にはもちろんのこと、私の経営している美容院の店員たちにもここへ来ることは内緒にしてあった。

母だけは子供のことは知っていたけれど、占部には私の過去の生活は秘密にしてあつたし、店の女の子たちは、私がどんな生活を持った女かなど夢にもしらなかった。こんな大きなやしきの中に、私の娘がいるのかと思つたら、妙に気おくれがして門の入口で私はすこしためらつた。

七年前の横浜時代に仲よしだった湯本ミネに、偶然に二月ほど前銀座で会って、エルザがこのホームにいと聞くまでは、私は娘のことは何もしらなかった。エルザが生後十カ月の時、ジョウが飛行機事故で死んで、それから間もなく、富枝は私の留守の間に、こっそり赤ん坊を市の保育所にあずけてしまったのだった。私が保育所に子供を取戻しにかけつけたときには、エルザはすでにどこかへ移されていた。

よほど固く母に口どめされていたとみえて、いくらたのんでも子供の行った先を、保育所ではどうしても私に打ちあけてはくれなかった。そのころ十九だった私が、半黒の子供など抱えてこれからの長い生涯をどうするつもりだというのが母のいい分だったけれど、本当は、私がみつともないくろんぼの子を産んだといって、富枝はエルザを憎んでいた。その晩から、板のように硬く張って、幾日も疼きつづけた乳房の痛みを、いままなましく私は思っていた。

銀座で会ったとき、ミネはそういった。「私の息子と同じ宿舎に、たしかにエルザがいるんだよ、神露岐エルザ、年もヘンリーと同年の八つ、しかも半黒の娘だよ、名簿にちゃんとそう書いてあったんだもの、「こおろぎ」なんておかしな苗字がそうざらにあるもんかね、あんたの子のエルザにまちがいはないよ」

エルザが生まれる一、二カ月前に、白人の兵隊との間に生まれたミネの息子は、出産後すぐに町の保育所にあずけられたが、四、五年たって、ビアトリス・ホームにその子がいると知ってから、ミネはときどき訪ねて行くのだといった。

当時の商売はもうやめて、ミネは今では銀座裏のバアにつとめているということだったが、そのときあまりいい恰好をしていなかった。

ミネにエルザの話をきいてから、私の癒えた傷は再び血をにじませはじめた。過去の私につながるもの一切を、忘れようとつとめ、今はもうすべてを忘れてしまったのだと、自分ではそう思っていたのに、エルザだけは、やっぱり埋み火のように私の裡に残っていたのだろうか。

客を相手に仕事をしているときにも、占部千吉が泊った晩でさえ、私はふっとエルザのことを思い出すと心がいらだった。一度だけどうしても子供をみたいと思いだすと、どうしても我慢ができないのだった。

ココア色のまるい頬と、乳のにおいのする濡れた小さい唇と、ジョウにそっくりの栗のような大きな目、黒い毛糸玉をほぐしたような縮れ毛の頭が私の胸をおしつけてくる。私の膝の上で、白い上下の二枚歯をのぞかせて乳房をまさぐるとき、しめっぽい赤ん坊の掌の感触が、昨日のことのように私の中を流れてゆく。

ミネは目を輝かせて息子の話をした。彼女の息子はアメリカ人の父親似で、ミネにちっとも似ていないこと、栗色の髪をして大きな目が緑色をして、色の白いのもすりりとした体つきまで、好男子だったアウグストそっくりだとミネは自慢そうにいった。

八年前ミネの男は、彼女が妊娠したことを知ると急に側によりつかなくなった。つぎつぎにはかの女を漁り歩いていたが、間もなく軍隊とともに、男はアメリカへ引揚げていってしまった。それっきり、彼からは何の音沙汰もなかった。当時、男のことを浮気な薄情者だと、あんなに罵り呪ったことなどケロリと忘れて、息子が惻口で愛嬌があるのは、父親ゆずりだとミネは得意そうだった。今度、ミネの息子は進駐軍の将校の養子にもらわれて、来年あたりにはアメリカへつれて行かれるのだということまで、ミネは、つり上がった目を細め、平べったい鼻をふくらませて私にしゃべった。

そのミネの息子といっしょに、私のエルザもここにいる。ゴムまりのように肥っていた小さい赤ん坊が、七年の間にどれだけ成長しているだろうか、それをたしかめさえしたら、私はもう二度と娘に会わなくてもいい。過去とは絶縁して、今の新しい私の生活が在った。今日エルザを見たら、もう二度と会ってはならないと心にきめて家を出てきたのだった。

途中で、子供の喜びそうな玩具や菓子を買った。私の手には大きな包みがぶらさがっていた。

門を入ると木立の間を長いコンクリートの道がつづき、暗いトンネルがあった。ひやりとつめたくて、向う側の出口がのぞき目鏡のようにまるく浮き上がっていた。誰もいない穴の中に、私の足音だけが無気味に跳ね返った。

トンネルを抜けると、暗いところから急に明るみに出たので、ちょっと目がくらみそうだったが、気がつくと、あたりには夕暮がせまっていた。秋らしいもやがうつすらと立ちこめて、トンネルの上の木々の茂みがぼやけていた。トンネルの上は丘になって、そこもこの広い邸内の庭の一部になっていることがわかった。

目の前にどっしりした日本建築の玄関があった。さっき石の門の前で感じたためらいが、ちょっと私の足を重くした。ひっそりした家の中からは、子供たちの声らしいものは何も聞えてこなかった。玄関脇の、町医者の窓口みたいな受付におずおずと私は近よった。

「こちらに、神露岐エルザって子供が、お世話になっておりますでしょうか」

窓口から顔を覗かせた若い女が、じろじろ私を見て、エルザとどういう関係の者かと事務的にきいた。

「私、あの子の母親なんですけど」

私の声はふるえた。はじめて口にする母という言葉、いってはいけなことをいったときのよう
な恥ずかしさと悔いに似た気持が私をついた。

つぶやく私の顔を、女事務員はさぐるように見て、今日はもう面会時間をすぎているので、明日
また出直してきてくれ、といった。

「東京からやつのことで出てきたんで、明日、また出直すってわけにいかないんですけど、何
とかしていただけないでしょうか、ちょっと様子をのぞいていくだけでもかまいませんから」

それをきくと、女はさげすむような目つきをして私を見つめた。

「子供に会えなければ、誰かほかの人でも、園長先生にでもお目にかかって、お話だけでもきい
て帰りたいんですが」

私は真剣な顔でたのんだ。もし、今日のこの機会を失ったら、二度とエルザに会えないような、
そんなとりつめた思いが私をせきたてる。女は困ったように顔をしかめた。首をねじむけて後にい
る人と何か話していたが、受付の横の出入口から奥へ消えて行った。しばらくすると、頭の頂きが
すこし薄くなった中年の男が、のっそりとした恰好で出てきた。

「困りましたな、もう時間外ですし、それに園長は今来客中で、ちょっと手がはずせないんです
がね」

肥った腹をつき出して、はれぼったい目をしょぼつかせて男はそういった。

「それで、あなたの用件というのは？」

おだやかな態度だけれど、どこかに尊大なつめたさがあった。私はとっさに、何といていいか
わからなくなつて、あわてて手にくいこんだ包みの紐をとくと、だまって大きな荷物を男の前につ

き出した。

「これ、洋服や玩具やお菓子なんですけど、エルザにやりたいと思って……」

私は愛想笑いを浮かべたつもりだったけれど、頬がひきつれて、泣きそうな顔になったのが自分でもわかった。

「ああ、そうですか」

簡単にうなずいて、男はチラッと荷物を見たきり、だまって立っていた。

「あんたは、はじめてここにきたんですか」

男が訊ねたので、私はやっととりつくように

「ええ」

と大きな声で返事をした。

「はじめてなんです。七年前に別れたきり一度も会ってないんです。この間はじめて、湯本ヘンリーのお母さんに会ったときに、ここにエルザがいるときいて、今日とんできたんですけど」

「ふうむ」

どこかとぼけたような風貌の、まるい鼻の上に皺をよせて、男は改めて私をジロジロ見た。

「湯本ミネさんとあんた友だちですか」

いくらか蔑むような色がうかんだ。

「ええ、いいえ、ちょっと知ってるだけです」

私はドギマギしていった。何か痛い傷口にふれられたような気がした。

「昔ちょっと知ってたんですけど、長いこと会ったこともなかったんです。七年ぶりに偶然出会

って……私、今、東京で美容院をやってます」

「ふうむ」

と男はそういうと、しょぼついた小さい目で、もう一度さぐるように、私の頭から足先まで眺めまわした。

「二、三年前から、あの人もときどきやってくるんですが、でも、ほんとうをいうとね、お母さんたちに来られるのは、この保育園ではあんまりうれしいことではないんですよ」

苦がっほい笑いが頬にうかんで、男は薄くなった頭に手をやった。

「このごろ、だんだんそういうお母さんがふえてきてね、どういうわけなのか……」

男はあいまいな微笑をすると、すこしつめたい顔で私を見つめた。

「ここの子供たちは、大抵もの心もつかないうちに親にはなれているんで、園長の谷口先生をみな、ママと思ってるんですよ。お母さんは谷口先生きりないと思ってる。そこへ新しく思いがけないべつのママが出てくると、子供たちはとても大きなショックを受けるらしいんだね」

男はそういって、肥ったまるい顎をちょっと持ちあげた。

「今までにもたびたび例のあったことですが、お母さんに会うと、どの子もきまってあとがいきけない。あかるくて朗らかだった子が急に不機嫌になったり、ふさぎこんだりしてね、素直だった子が急に神経質に怒りっぽくなって、それだけならいいんだが、ほかの子供たちへの影響がまた大きいんでね。みなでよってたかって、その子をいじめるんですよ。いたずらをしたり、仲間はずれにして遊んでやらなかったり、どうも、子供同士でもうまくいかな。自分たちにはないお母さんが、その子一人に出てきたってことが、みなにも癪にさわるんですかね、一種のやきもちでしょうな」

重い瞼の下の細い目を男はすこししわめた。

「子供ってものは敏感でね、とくにこんなところに育った子は、園長をママとよんでいても、やっぱりお母さんに飢えているんじゃないかな、はじめてやってきた本当のお母さんを、すぐ見破ってしまう。会うとき、かならずお母さんにも注意して、周囲の者も勘づかせないように十分気をつけているんだが、その点になると、ここの子供たちは動物みたいに敏感で、ちゃんと知っている。単なる訪問客か母親か、それを見分けるのは、まったく天才みたいですよ」

男はかるく笑った。私はそれをきいているうちに、体の中を針みたいなものでつつかれているような痛みを感じた。この痛みはなんだろうと思った。

「今日は時間がおそいで、ほんとうはもうお断りしたいんだが、せっかく遠方からはじめて見えたんで、ちょっとご案内だけはしますがね。今お話したようなわけだから、子供に会われても平静にして、お母さんだということをなるべく感づかせないようにして下さい」

それだけいうと、男は無雑作に玄関口にあった靴をつっかけて降りてきた。私はやっとほっとした。だが、私の胸は思いがけない重さにとらわれた。今まで考えてもみなかった大きなものが、急に私の肩にのしかかってきて、私はそれにおびえるような気持だった。

男の後から、私は玄関の前のコンクリートの道を、庭の方へついていった。ぶらさげていた手の荷物が急になくなって、変に軽くなった体が、すこしふらつくような気がした。ちょっとした小石にもつまずいたらころびそうな、そんな不安が私をさらっている。私の持ってきた子供への贈りものは、男の無雑作にしゃくった顎の先で、さっきの不愛想な女事務員が、邪魔ものでも扱うように、さっさと奥に持っていった。あの数々のみやげものを見て、エルザがどんな顔をするだら

うかなどと楽しみにしていた私の夢は、無残に破られてしまった。私は歩きながら、私とはかけはなれた遠い世界へ旅をするような心細さを感じた。ここにエルザがいる、その感じがだんだんぼやけてきて、娘と私とをつないでいるものが稀薄な、ひどくたよりないもののような気がはじめた。私のとらえているものは、エルザのあの甘酸っぱい体臭や、膝の上にのせたとき、ぼつてりと肉体に感じる重みや、そして、別れた晩から二、三日、痛みつづけた乳房の疼きよりない。それから先はポツリと切れてなにもない。悲しみに似たたよりなさが私の心を濡らしはじめた。

玄関側からコンクリートの道を降りていくと、生垣のある広い庭に出た。垣根にまといついた小菊の黄や赤の花々が目にしみた。垣根の中は畑で、大根や菜っぱが青々としている。男の説明によると、この一万何千坪かの広大な邸は、もと有名な財閥の別荘だったということだった。戦後アメリカ軍に接収されていたのを回収して、その財閥の娘だった谷口直子女史が、政府から混血児の保育園に譲り受けたものだった。谷口夫人は熱心なクリスチャンで、外交官夫人でもあるということだった。

畑の前に同じ形のペンキ塗りの建物が三つならんでいた。総ガラスの大きな戸が畑にむかって光っている。最初の建物は乳幼児の部屋だった。二十畳ばかりの板張りの部屋に、小さいベッドが二十ばかりもならび、枠のはまった子供用ベッドに五、六人の赤ん坊がねむっていた。その片隅の上げ床の上では六、七人の子供たちが騒いでいた。下の床の上をはいずりまわっている幼児や、ヨチヨチ歩いている子供たちも七、八人いた。三人の若い保母が、夕方の就寝前の世話に走りまわっていた。寝衣に着換えさせたり、おむつのとり換えや、まるい洋便器にかけさせたりしていた。

私がいってしまったガラス戸に近よると、青い眼の白い皮膚の子供にまじって、黒い顔の子がヨタヨタ

した足どりで歩いてきた。まだはっきり男女の見分けのつかない幼児たちは、めずらしいものを見たときにはしゃぎ方で、中で何かさげんでいた。一人の黒い混血児が私を目がけてつき進んできた。ガラス戸に顔をおしつけて鼻がつぶれ、そり返ったまつ毛の中から栗の実みたいなまろい大きい瞳が、無心に私に何か呼びかけた。くびれた掌でしきりに幼児は戸をたたきはじめた。手の甲にくらべて掌が区切ったように白っぽくて、とりつめた真剣な顔で赤ん坊は両手をガラス戸に打ちつけた。何かそうしなければいけないはげしい欲求でもあるように、子供はわめき、全身の力をこめて戸をたたく。

見ているうちに、私はだんだん胸がしめつけられるような息苦しさを感じはじめた。私の乳房をまさぐるときの、しめっぽいエルザの小さい手の感触が私をゆすぶる。体の芯から熱い風が吹きあげた。胸先がムズムズして、だんだんそれは咽元にこみあげてくる。私は何か叫びだしたいような衝動にかられて、あわててそこをかけた。

次の家は四、五才の子供たちの部屋だった。四十人ばかりの黒や白の男女の混血児たちが、閉まったガラス戸の中で、細長いテーブルの前に腰かけて食事をしていた。三人の保母たちが世話をしていたが、中の声が聞こえないので、子供たちの笑ったりしゃべったりする姿や、匙で皿のものをしゃくったり、床にこぼしたりする恰好が、まるで音のない映画を観ているようだった。

日本人ばなれのした子供たちの風貌からくる印象であろうか、私はどこかでたしかにこんな外国映画の一場面を見たような気がした。赤ん坊を見たときのあの感動は消えて、私はしばらくたのしい気持ちでたらずんでいた。

次の建物はカーテンが下りて何も見えなかった。その前を通りすぎると、砂場やブランコのある

せまい運動場があった。その片隅にひとつらなりの蜜柑畑があって、三四十本の木に、まだ青い実がいっぱい葉の間からすけて見えた。つややかなまるい蜜柑の実が、白っぽくせまった夕暮のなかに鮮明に浮いていた。

「この蜜柑も大事な子供たちのお八つでね、畑の野菜もそうですよ、何しろ百五六十人の孤児たちを、個人の力で養って、教育までしてやるというのだから、園長もなみたいていの苦勞じゃないでね。自費をはたいてアメリカまで寄付を募りにいったり、世界中の宗教団体に呼びかけたり、見てもきりどくなほど走りまわっているんですよ。まったくこんな仕事は洒落や道楽じゃやれないね」

歩きながら男はいった。私はだまってそれをきいていた。自分の子さえ棄てた私と、人の子を拾いあげて育てている谷口夫人と、これはどういうことなのだろう。私にはよくわからない。谷口夫人と私との間には、何か根本に大きなずれみたいものがあるような気がした。ずれの谷間に落ちこんで動きもとれず、今ごろになって、ノコノコと母親だと名のって子供に会いにきた私は、ひどくとんまな、いやらしい女のような気がした。そう思いはじめると、私の足は一層重くなって、先の見えない深い穴が私の前に急にポツカリと口をあけて、私はそれに呑みこまれてゆくような怖さを感じた。私の手の届かない未知の世界が目の前にひろがっている。私の心は不安にふくれて、ノロノロと男のうしろについていった。

二 章

垣根の外の広いコンクリートの坂をのぼりきると、勾配のある庭に出た。松や楓が恰好よく植わって、その間から凝った茶室風の家が見えた。それに続いて不調和と思われるような新しい洋館がならんでいる。

「エルザのいるのは、あの学童宿舎です」

男が茶室を指していったので、私は危うくつまずきそうになった。私はうかつにも、娘の年はおぼえていたが、彼女がもう幼児ではなくて学童になっていることを忘れていた。私はやっと、エルザが二年生になっていることに気がついた。私と子供との距離がさっきよりはもっとひろがって、その空隙に落ちこんで、ちょっと途方にくれている自分を感じはじめた。正面に茶室の座敷が見えて、赤茶けた電灯の下や縁側に子供たちが十数名うずくまって何かしている姿が浮かんできた。

「あそこが一、二年生の部屋です。三、四年と五、六年の宿舎は、この先の丘の上にあるんですが、何しろまだ設備が十分でなくてね、学校の方はその丘の方に新しいのが建っているんだが、二